opusdei.org

## オカリス師「平和の ために働く決意を新 たにする |

聖ホセマリア帰天50周年にあたり6月26日にフェルナンド・オカリス師がスペイン紙『エル・ムンド』に寄稿した記事の和訳を掲載します。

2025/07/14

『エル・ムンド』記事へのリンク (スペイン語)

この教皇のメッセージは、「心の平和」から「全地の平和」へと向かうひとつの道筋を示しています。数がる可能性の中から、レオ十四世したでものは平和を告げることでは、新聞の一面には、不穏ないます。りの欠如が映し出されています。りの大国間や社会的な出来事ばかので大国間や社会的な出来事ば場の間における日々のささいなやり

取りにおいても平和は不足しています。また、心のうちにも、不安、疑念、焦り、心配が支配し、平和は見られません。

このような状況にあって平和を願う ことは、良く解釈してもユートば守る のように思われ、悪く捉えれば守る べき理想の放棄とさえ受け止めちれてします。けれども私たちスト としまは知っています。(エフト を私たちの平和であり、私たちが願う平和は神かに、私たちが願う平和は神かになる は知っています。(エファンらの はかで、それを受け入れ他者があることを ということを。

今日、オプス・デイ創立者、聖ホセマリア・エスクリバーの帰天から50年を迎えるにあたり、彼のもっともよく知られた言葉のひとつが思い起こされます。それは「平和と喜びの種蒔き人」になりなさいという呼びかけです。美しいが非現実的な言葉

に思えるかもしれません。しかしこ の言葉は、スペイン内戦と世界大戦 という破壊的な時代を身をもって経 験した人物の証言に他なりません。 その劇的な時代において、聖ホセマ リアは〈塹壕〉ではなく〈橋〉とな り、分断ではなく一致を生み出そう と努めました。司祭として、またキ リスト者としての信念は、彼が「右 の人、左の人、向かいの人、背後の 人、すべての人に大きく開かれたし 生き方をするよう導きました。十字 架上のキリストのように両腕を広 げ、敵のためにゆるしを願い、歴史 において――ベネディクト十六世が 好んで語ったように――「愛の革 命!を推し進めたのです。

このように暴力が〈最後の言葉〉となりそうなとき、攻撃が唯一の選択肢に見えるときにこそ、地上的な論理を超えて、キリストの模範へと視線を向ける機会が生まれるのです。「キリストはわたしたちに先立って

歩んでくださいます」と、選出直後のスピーチで教皇レオ十四世は述べています。そして続けて言いますしています。人類は、神とその愛を必らいます。人類は、キリストを必要としています」。平和は、私たちがとして願い求めるべき神からの賜物なのです。

さらに私たちは皆、それぞれの場所 で、心と人間関係に平和をもたらす ことができます。それはたいてい、 家庭、近所、職場などにおける、ほ んの小さな和解の振る舞いから始ま ります。同時に平和は、愛によって 生かされた正義の上に築かれる必要 があります。自らが神の子であると 知る者は、他者の中に「兄弟姉妹」 を見出すのです。聖ホセマリアはこ う勧めました。「私たち一人ひとり がキリストにおいて生まれ変わり、 その結果、新しい被造物、つまり神 の子となった。したがって、私たち

は兄弟であり、兄弟らしく振る舞わなければならない」(『拓』317番)。

平和への普遍的な渇望は、ますます 目に見えて切迫したものになってい ます。暴力を嘆くだけでは足りませ ん。信仰の有無を問わず、誰もがそ れぞれの場で〈平和の生態系〉を育 むよう招かれています。平和を持つ 人は、その存在によって平和を伝え ます。それは人と接するときの態度 やものごとに対する反応に表れま す。この平和を育むという使命は小 さなことから始まります――言葉づ かい、会話の内容、家庭や職場、大 学、デジタル空間などにおけるさり げない態度などです。教皇レオ十四 世は数日前こう語りました。「平和 はユートピアではありません。それ は日々のささやかなしぐさによって 織りなされた小さな道です。そこに は忍耐と勇気、傾聴と行動が織り込

まれています」(2025年6月17日)。

聖ヨハネ・パウロ二世は列聖式にお いて、聖ホセマリアを「日常生活の 聖人 | と呼びましたが、それはこの ような意味においてです。それは創 立者のメッセージの核心を表してい ます。つまり神は日常の中におら れ、そこには平和が築かれるという ことです。そこで通常求められるの は、英雄的な行いではなく、忍耐や 親切、ゆるしを通して絆を作り上げ ていくことです。日常生活の中の 〈戦争〉は爆弾から始まるのではな く、きつい言葉、ちょっとした軽 蔑、自己中心や無関心の態度から始 まるのです。

真福八端の「平和を実現する人々は幸い」(マタイ5・9)という教えについて考察しながら、教皇はマスコミ関係者にこう呼びかけました。「情報の〈伝え方〉は根本的に重要

です。言葉と映像による〈戦争〉に ノーと言わねばなりません」(2025 年5月12日)。

聖ヤコブの言葉は、まるで今の時代について語っているかのようです。彼は人間の中にある善と悪の緊張関係についてこう記しています。「ねたみや利己心のあるところには、混乱やあらゆる悪い行いがある(…)。上から出た知恵は、何よりもまず、純真で、更に、温和で、優

しく、従順(…)です」(ヤコブ3・ 16-17)。

内なる平和から周囲への平和が生ま れます。私たちはそのような経験を 持っています。〈平和の匠〉と呼べ るような人がいます。その人は光を もたらし、心の一致と調和を紡ぎ出 し、視野を広げ、喜びを伝播させま す。人生において、このような人と 出会ったとき、私たちは感謝の気持 ちで一杯になります。これが教皇フ ランシスコが言うところの「お隣の 聖人(saints next door) | です。彼ら は平和を築く「お隣さん」なので す。彼らは、その生き方を通して、 私たちに平和を伝えます。

多くの場合、私たちができる周囲の 人たちに対する「平和への貢献」 は、他者を理解する姿勢を育むこと にあります。聖ホセマリアはこう教 えました。「愛徳とは与えることよ りむしろ理解することにあります (…)。人々を理解する心は神のよい子が持つキリスト教的愛徳の証拠です。毒麦ではなく、愛と平和と赦しと寛容という兄弟愛の種子を広めるために(…)働く私たちを神は必要となさるからです」(『知識の香』124番)。

今日、聖ホセマリアを記念するとい うことはまた、平和のために働くと いう決意を新たにすることでもあり ます。それは「すべての人の兄弟と なり、平和と喜びの種蒔き人」にな るということです。教皇レオ十四世 がその最初の演説で告げた復活され たキリストの「〈武装〉しない平 和、〈武装解除〉させる平和しは、 私たちの毎日を照らし導いてくれる ことでしょう。それは抽象的な理想 ではなく、具体的な姿勢、生き方で あり、この世界に和解と希望と一致 を生み出すものなのです。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ocariz-kiji-elmundo20250626/(2025/12/11)